

第 27 回日本ジオパーク委員会議事録

日時: 2016 年 5 月 21 日 (土) 9:30~17:00

場所: 新規加盟認定地域プレゼンテーション 9:30-15:00 幕張メッセ国際会議場 3 階 301 会議室
委員会審議 15:15-17:00 幕張メッセ会議場 1 階 101B 会議室

出席者:

委員長

尾池和夫 京都造形芸術大学 学長 (日本地震学会)

副委員長

中田節也 東京大学地震研究所 教授 (日本火山学会)

委員 (以下五十音順)

浅野眞希 筑波大学生命環境系 助教 (日本第四紀学会)

大野希一 島原半島ジオパーク事務局 次長 (日本火山学会)

菊地俊夫 首都大学東京都市環境科学研究科 教授 (日本地理学会)

佃 栄吉 産業技術総合研究所 理事・地質調査総合センター 代表 (日本地質学会)

中川和之 時事通信社 解説委員 (日本地震学会)

成田 賢 全国地質調査業協会連合会 会長 (関係団体)

橋詰 潤 明治大学研究・知財戦略機構 特任講師 (日本第四紀学会)

平田大二 神奈川県立生命の星・地球博物館 館長 (日本地質学会)

宮原育子 宮城学院女子大学現代ビジネス学部 教授 (日本地理学会)

顧問

伊藤和明 防災情報機構特定非営利活動法人 会長

高木秀雄 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

町田 洋 東京都立大学 名誉教授

APGN 諮問委員

渡辺真人 産業技術総合研究所地質情報研究部門地球変動史研究グループ グループ長

日本ユネスコ国内委員会

仙台文子 文部科学省国際統括官付ユネスコ第三係長

関係省庁

大森公博 観光庁観光地域振興部観光資源課

柴田伊廣 文化庁文化財部 記念物課文部科学技官

曾根 進 内閣府地方創生推進事務局参事官補佐

長谷部大輔 気象庁地震火山部火山課火山防災情報調整室調査官

松本良一 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室

三浦慎司 内閣府地方創生推進事務局

山本 豊 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室係長

事務局

齊藤清一 日本ジオパークネットワーク事務局事務局長

杉本伸一 日本ジオパークネットワーク事務局次長

神谷方子 日本ジオパークネットワーク事務局員

木村彰太郎 日本ジオパークネットワーク事務局員

酒井誠一 日本ジオパークネットワーク事務局員

内藤朋子 日本ジオパークネットワーク事務局員

中山由美子 日本ジオパークネットワーク事務局員
目代邦康 日本ジオパークネットワーク事務局主任研究員
森本浩文 日本ジオパークネットワーク事務局員

プレゼンテーション

司会： 竹之内 耕（糸魚川市教育委員会）
松原典孝（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科 助教）

（発表内容は省略）

<質疑応答>

霧島

委員長：北西南東方向にひっぱる力が働いて、その方向に火山列が並んだというしくみがよくわからなかったので詳しく説明してほしい。

霧島：北西南東方向のひっぱりで北西南東方向にある断層とそれに直交する断層があるという事実があり、それがそのひっぱりの〇〇（応力?）によってできているという解釈が論文にでている。

委員：伸びている方向と逆にひっぱられているのですね。直交する方向にも断層系がいくつかあり、その方向にいくつか別の配列があるということですね。直球で質問する。日本ジオパークとして着実に実績を積み、お手本になるようなジオパークになってきていると思う。ですが、1回目の申請時とは背景がずいぶん変わってきている。ひとつは世界ジオパークがユネスコの正式事業化したことで価値が問われ始めていること。もうひとつは、その間に日本では3つの活火山のジオパークが存在することになったこと。この後プレゼンテーションを行う桜島・錦江湾も手を挙げており前回の申請時とは違っている。世界からみると活火山のジオパークが日本からいくつもでてきており、しかも、隣り合っているのはなぜかと思う。桜島・錦江湾とは同じ鹿児島地溝帯にあって火山活動の恩恵も受けている。外国の審査員や訪問者が来たとき、近くの桜島が煙を上げているのを見て、そこに行きたいと思ったとき、なぜ、このジオパークは別々なのかと疑問に思うだろう。非公式に今までJGC委員から2つが一緒に申請したらどうかと勧めてきたにもかかわらず、こうして別々に申請してきたことに対してなぜか、ということと、もし一体化することに障害があったら何か、今後どのように展開しようと考えているのかを伺いたい。

霧島：同じ火山列として一体化することはパワーアップになるということは認識している。しかし、この10年、6つの自治体が連携し、地道に努力を積み重ねてきた。お互いの個性について協議をし、お互いの気持ちを推し量った結果。

委員：質問の趣旨は、隣の桜島・錦江湾となぜ一緒に申請することを模索されなかったのかということ。

霧島：話し合ったことはあるが、結果として一緒に申請することに至っていないということでご理解いただきたい。

委員：将来的に二つともなるのは国際的情勢から厳しいと感じる。もし霧島だけがユネスコ世界GPになったら、桜島のことはどう思うか。どのように展開していこうと考えているか。

霧島：世界認定になったら、桜島には手を差し伸べて火山列の一本化した流れで、九州はひとつ、くらの気持ちで大きくまとまる日を目指すことができれば、と思っている。

霧島：霧島は6つの自治体で構成している。鹿児島県と宮崎県が協力してやってきた。ここ数年、南九州問題ということでアドバイスを受けている。事務局レベルではそのような情報を共有しながら今日に至っている。鹿児島地溝帯、三島、指宿などと一体となって申請できれば南九州としてすばらしいジオパークができるだろうと期待はしている。一方、自治体、地域の積み上げてきたものをどのように整理したらよいかという課題がある。時間がかかる。今、言えるのはそこまで。協議を重ねないと難しい。

委員：世界申請は、ひとつで一緒にやっという話し合う良いきっかけになる。世界になることで何がどう、実現できるのか。日本ジオパークのままではできないのか。ブランド名で集客できるというのはあると思うが、どう世界に対してアクションをおこしたいか。

霧島：国際的な火山学習や観光地をめざしたい。世界ジオパークになるとやることも増え、お金もかかるが、火山の噴火を経験しているので、海外から火山関係の方を迎えて学習や観光に活かしていける。

委員：世界への貢献が必要。人を呼ぶだけでなく、こちらから仕掛けることが必要。

霧島：ユネスコの正式事業化にともない、世界貢献が求められているが具体的なことをこれから考えていきたい。

委員：日本の先が世界ではなく、世界（GP）では別のことを求められている。海外からの観光への対応は日本ジオパークでもやるべきこと。世界のジオパークにどのように貢献できるかという点がなく、世界申請の意味が整理されていないので、その点を確認したい。GGNになるには実績があることが必要だ。その一つとして、ジオパークになった後に噴火した時の教訓をどのように発信したのか、評価されたのか、教えてほしい。また桜島とも、その経験を共有したことがあれば教えて欲しい。

霧島：鹿児島国際空港は霧島市にある。空港は韓国ソウルにつながっている。今度済州を訪問する。ジオパークである釜山も訪問した。釜山とは20数年の観光関係の連携をもっている。香港の直行便があり7月からデイリー運行になると聞いている。香港のほうとも直行便を活かしながら行き来できる時代になっている。私共の観光施設は多言語表示をしている。国の流れがインバウンド強化ということで二千万から三千万人の来訪者を対処できる自信がある。

(了)

桜島・錦江湾

委員長：霧島、桜島、鬼界カルデラでひとつの地溝帯にいろいろな火山が並んでいる。鹿児島の特徴は先ほどお話にあったとおりだが、同じ火山帯にある他の火山との比較で、なぜ霧島がそのようになっているのかなど、それぞれの違いを考えたことはあるか。

桜島：難しい。それぞれのマグマやまわりをとりまく環境が火山のかたちを規定しているのと思う。また、カルデラがあるかないかは大きな違い。

委員：同じ質問。霧島と申請して三島村まで含めるような構想は魅力的と思うが、今回申請している霧島と一緒に申請するためには何をしてきたか、また何が問題で、どうしたいか伺いたい。

桜島：検討は事務局レベルではしている。鹿児島地溝の成り立ちは理解しているが、ブルカノ式噴火をしている桜島と、海のカルデラを活かした現在の桜島・錦江湾ジオパークで、住民の意識もそこにあり、ジオ活動も確立しているので一足飛びにはそこまでの検討には至っていない。

桜島：桜島・錦江湾として世界をめざすことを念頭に住民の意識も高まってきている。世界にむけ

て申請をする際にどういう形がよいか協議をしていく場を設けていく必要があると思う。

委員：境界に不自然さを感じる。世界ジオパークの審査では境界を真剣に考える。一筆描きというのは決まっているが、その中に地域住民がどう関わっているかや、管理運営が保証されているかなども考慮される。人と資源という観点からすると錦江湾の丸い境界は不自然さがある。若尊カルデラも半径5キロの円とあるが、誰でもわかる境界ではない。また、若尊カルデラには水産物がたくさんあり、漁業で生活している人たちが霧島市沿岸部にいる。そういう資源や人達を含めた地域であるべき。鹿児島市側も桜島から円を描いてどこかで急に切れるような、家をまたぐような境界になっている。やはりそれではおかしい。地域の人がジオパークを自分達の資源としてプライドをもって維持していくことを考えると、境界は考え直さなくてはいけないと思う。そのことについて何と回答するか。

桜島：桜島を中心とした火口10キロの円と若尊カルデラを含む半径5キロの円としているが、鹿児島市域を緩やかに結んだ円となっておりいびつな形をしている。まず火口からの距離として鹿児島市域内をきっている理由は、火山がおよぼす様々な影響は火山からの距離に関係する場合が多いので、例えば火山被害予測図も火口からの同心円上のエリアが危険地域に指定されているなどの考え方から日本ジオパークに申請する際に火口からの距離という考え方でエリアを設定した。また、桜島からからの距離10キロについては、現在単独市町村鹿児島市だけのほうが意思決定は速く柔軟な活動ができるため鹿児島市域をむすんでおり、いびつな形になっている。若尊カルデラ周辺の始良カルデラまで広がると、エリアについては指摘があったように検討すべきという認識はある。

委員：今の段階で世界を目指そうというが、今まで日本ジオパーク活動をしてきて得たものは何か。さきほど地域の誇りがあったと言っていたが、それを活かすことが世界ジオパークになることではない。桜島で新しい価値をつくったから、それを世界の皆さんと共有したいということだと思うが、例えば去年の噴火のときジオパークであったことが、どのようによかったか。それによって何が得られて何を世界に発信することができるか、あるいはすでに世界に発信したというような実績があれば教えてほしい。

桜島：日本ジオパークになる前は、NPO法人桜島ミュージアムでの取り組みだけだったが、ジオパークになって推進協議会一体となり、またミュージアム以外の方にも深く関わっていただいている。噴火警戒レベル4に上がった時、行政でなく桜島ミュージアムがフェイスブック等で発信してくれた。ジオパークになったことで、行政だけでなく、官民一体となった取り組みが進むようになった。協議会は、世界への発信としてフェイスブックの外国語版を作っている。十分ではないが海外向けにも情報を発信している。

委員：ミュージアムを中心に斬新的な企画をしており、全国のジオパークが見習うべきことは多い。日本としては十分。今のままでよいのではないか。世界遺産になる地域ももとに戻ろうとしたりしている。体制を変えるなど何かしないと、持続するのは難しい。今も世界から人が来ているわけで今のままだでもよいのでは。世界を目指す理由は何か？

桜島：日本のままだでも桜島の価値を発信していきたいが、ユネスコ世界ジオパークになることで灰フェスのように、火山があることをプラスととらえたイベントや取り組みをしていることを世界に情報発信していきたい。現在も京都大学や、防災面ではインドネシアと連携している。世界の火山のジオパークと勉強会を開催するなどの交流をユネスコ世界ジオパークになって実現させたい。

委員：世界へのセールスポイントとして火山と都市との共生があったが、具体的に世界にどうい

ところを見てもらいたいと考えているか。

桜島：60万都市が火山の近くにあるということは、まず防災体制が万全でないといけない。桜島に関して言えば、世界トップレベルの観測体制を有し、世界トップレベルの観測坑道を現在建設中も含めて3本もっている。これは世界をみても桜島だけ。また島内外の避難訓練も十分されている。降灰対策にしても十分。60万都市との共生は防災が一番大事だと考える。当ジオパークの取り組みは、観光、教育、防災、保全で、その中の防災という面でアピールしたい。また、20世紀最大の噴火である大正噴火を経験したのは桜島だけなので、その教訓も活かし火山が大爆発を起こしたら何がおきるかという防災教育も実施していきたい。活火山と大都市の共生ということでPRしたい。

委員：ちなみに外国人を連れていった時感動されたのが、火山灰を出す日があるのと、雨どいがないこと。これが共生なのだと。こういうことをストーリーにするとよい。

委員：火山との共生というのは、大正噴火後も鹿児島市というのは元気で、市民は「こんな噴火が起こるとは思わなかった」などとは言わないということで理解してよいか。

桜島：そのようになるようにというご指摘と受け止める。

(了)

箱根

委員：南足柄市が今回編入して新たに申請するというので、南足柄市が入ることにより、箱根ジオパークとしてより充実するとのことだが、なぜ、最初から入っていなかったのか。

箱根：当初は広域行政としてまとまりのあった箱根町、小田原市、真鶴町、湯河原町1市3町でのスタート。議会や市民から南足柄市の参画への機運があり、南足柄市の約65パーセントは箱根の火山の形成に関わるとの学術的な話もあり、今日まで編入への準備をすすめてきた。

委員：運営経営にはガバナンスは大事。ジオパーク委員会としてもその持続可能性や発展性があるかを含め、ガバナンスや事務局の充実、人的資源なども現地審査で拝見したいと思うが、申請書を見る限り、誰がどのようにやっているのか、体制がどうなのか、また地元に伝えるメカニズムがわからない。2市3町でどのようにやっていくか伺いたい。

箱根：協議会の組織については、年に1回総会を開いている。協議会の総会には93の行政や民間の団体が入っている。それをまとめるのは1市3町の行政職員と県が作っている幹事会。幹事会は月に1回開催し、主にジオパークの方向性や計画をたてている。民間の会員とは検討会やワーキンググループを各分野で行い、看板を作る検討会やHPのリニューアルなどについて検討するという活動している。

委員：運営の事務局体制の規模は。

箱根：事務局のほうは箱根町企画課ジオパーク推進室に置かれており、事務局長含め3名の体制。私は行政職員だが専門職員のような立場でもある。事務局3名の他に他の市町もふくめ幹事会をつくっており、ジオパーク全体の連絡調整をしている。

委員：首長に事務局として進言するということはできているか？

箱根：5人の首長が今度誕生するが、質問への答えとしては、それはスムーズにいつている。将来的には会長は民間からでて民間主体になるのがいいと思う。予算の都合で官が主体になっているが、多くの民間団体には理解はしてもらっている。ジオパークを一緒にやろうという機運はある。将来、民間の協議会長のもとでできればよいと思う。2市3町の枠組みで観光協議会を共同でつく

り、何年も観光のPR活動をしているし、範囲を広げて2市8町が広域行政の協議会を作り何十年も同じ土俵で広域的な課題を解決してきたし、今もしているので5人の首長の意思疎通は十分できていると思う。

委員：すでに観光地として成立している中、ジオパークとして住民がどう理解してくれるかと最初は思った。知り合いがタクシーに乗ったら運転手がジオパークを何も知らなかったそう。ジオパークが浸透しているかどうかの指標を見つけないといけない。防災、観光、地域振興においてジオパークがうまくいっているかを住民の人がちゃんと実感して、観光の中心となる人達が自分達の言葉でジオパークを語れるかということが重要。そのへんの自己評価は。

箱根：実はそのへんが一番の課題。年間2,000万人の環境客が来るなかで、なぜいまさらジオパークなのかという声もあった。しかし、さらに奥深い、何度も訪れたい、新しい発見のある箱根を違った切り口でみてもらうために始めた。まだまだ誰でもがジオパークを説明できる状況ではない。箱根ジオパークだけでなく、各地域が持っている大きな課題だと思っている。市民活動が活発な南足柄が加わるということは他の1市3町も刺激され切磋琢磨されると期待している。

委員：プレゼンを拝見して継続認定の印象。他に継続認定するところのプレゼンをしていないので公平性に欠けると思った。あらたに拡大するという観点で質問したい。南足柄市を加えたことによって、ジオパークとしてのジオストーリー、テーマに関して変化したところがあるか、また変えないとしたらなぜか。

箱根：南足柄市のジオサイトをめぐること、伊豆半島が本州にぶつかった痕跡を探ることができ、大地のダイナミックさを実感することができる。古代の西国と東国を結ぶ間道であった足柄道、歴史を結ぶ東西の道に思いを馳せることができる。また、豊富な湧水と産業との関わり。大地と人の生活とのつながりを学ぶことができる。そうしたストーリーが新たに加わる。ちなみに南足柄は大地の恵みによる富士フィルムの創業地。

箱根：金時山というジオサイトは南足柄市と箱根町の境界にある。金太郎伝説の地。その話に関わるものが両地域にあり、他のエリアとの結びつきがある。

委員：南足柄市を加えたことによって、箱根火山がのっている伊豆半島一帯の大きなジオパークになっていくと思うが、将来的に伊豆半島との関係をどう考えるか。

箱根：さきほどの霧島と桜島・錦江湾と似たようなことだが、将来的には世界を目指そうと思っている。まず、足場を日本ジオパークとして固め役割を果たしていきたいが、いずれ世界をめざしたい。委員の先生方からは伊豆半島と一緒にめざすことを勧められているし、伊豆半島の伊藤市長は意欲的に世界を目指しているのでいずれは伊豆半島の方達とその話をしたい。単独でやるとすると、では、丹沢山塊はどうするかという問題もでてくるので、その点は先生方の意見を伺いながらやっていきたい。最後に、大涌谷の噴火で昨年は皆様にたいへんご心配いただいたが、ジオの産物である名物、黒卵が1年ぶりに復活した。まだガスの関係で園地には入れないが、この卵をご賞味いただければありがたい。

(了)

下北

委員：今回再挑戦ということで、前回の申請から変わった点、またテーマとストーリーのことについて伺いたい。まず、住民の関わりがさらにどうなるかも含めて変わった点について。また、JGNの活動の中で何を取り入れたか、日本のジオパークの貢献として何があげられるか。さらに拠点

施設の活用について。

下北：前回との大きな違いは、住民の盛り上がり。どれだけひろがっているか。ある日、あるおばあちゃんに、「市長、ジオパークのことばかりやらないで病院の待ち時間を何とかして」と言われたくらい、皆が知るようになった。体制という点では、前はむつ市役所の担当者が1人であったが、今回はジオパーク推進員として、地質と生態学の専門員を加え、6名体制で臨んでいる。関係市町村の中でも担当者を協議会に併任をかけた毎月1回連絡会を開催している。このように推進体制を拡大した。この二つが違う点。その中で参考にした点は、今のネットワークを活用し、様々なジオパークのサイトを見て、事務局体制、住民との関係を勉強した。JGNへの貢献について。多様性のあるジオパークを売りにしている。とりわけ海と大地との関係として、ブラキストン・ラインというものが津軽海峡にあるが、これがどうしてこうなったのかをひも解くことによって生態系と大地の関係を示すモデル地域として貢献したい。拠点施設については整備している段階。現地視察までには企画展を行う施設を作る。

委員：テーマとストーリーについて。下北ならではの生態と地質とのつながりであるストーリーを作っているかと思うが。日本列島の形成、東北、北海道との中での位置づけをどう思っているか。

下北：ジオパークの中でどのように生態系を活用していくか。地質と地形はメインだが、その上で生きているものに目を向けることでより効果的に地質や地形を感じられる場合もあると思う。先生から、津軽海峡の海底地形の具体例があったように、日本列島ができたプロセス、大地の歴史を踏まえた上での下北の生態系を説明できればよいと思う。

委員：考古学が専門なので、そのような切り口は分かりやすいと思う。

委員：よそのジオパークで学んだことを室戸だけでなくもっと具体的に教えてほしい。

下北：全国大会で霧島に行った際に桜島を訪れた。ガイドが地質地形の話をしながらも火山の石をビールの泡と液体に例えて説明していた。単なる地質・地形の話だけではなく、物に触れてみたり観光的な要素も含めてしっかりしたガイドの養成をしていかななくてはいけないと思った。ガイドの養成についてはそのような点を重視しながら取り組んでいる。

下北：山陰海岸ジオパークの豊岡ではコウノトリがひとつの資源になっている。生態学専門の立場から見たときにコウノトリを活用して農業の活性化に役立っているという事例を見た。コウノトリがいることはその餌になるものが生きられる田んぼがつくられていることを意味する。その視点を下北でも利用して生態系に着目しながら地質を見せながら地域振興につなげられるモデルを作りたい。

下北：事務局体制としては伊豆半島ジオパーク16市町で構成されている。全市長村から事務局をだしているという聞き、当方も5市町村が連携する上で参考になった。

委員：学生さんに質問。ジオパークの学習を通じて一番感動した点は。具体的にここがすごかったということは？

下北：自分の知らない自然が身近にあることに気づいたこと。一番感動したところは全部。

下北：私は薬研渓流に行った。トンネルを通過して出口が見えたときに緑がきれいだったのが印象的だった。

委員：逆にたいしたことがないと思ったのは？

下北：ない。

委員：教育活動について事務局に聞きたい。6地域の中学校でやられているとのことだが、小学校までやる予定はないのか。ジオパークを進める上で教育活動は重要だが、申請書のところでみえてこないのでビジョンを教えてください。

下北：見送りになってから、協議会の会員数を大幅に増やしており22から47の会員。47のなかで教育を司る小学校の校長会、中学校の校長会に入ってもらった。今年度は市内の小学校、中学、高校で取り組んでいる。レベルにあわせた事業を考えている。

委員：テーマのまさかりを現場でどう表現するか。

下北：ガイドブックを現在作成しており、そのガイドブックの表紙をみて、また地形をみるとまさかりと思うのではないかと。そこは少し工夫することにする。

委員：この2年間の展開がよくわかった。今のプレゼンで申請書にみえないものがたくさんあった。プレゼンで表現するのもいいのだが、申請書に2年間のプロセスも入れておいたほうがよい。そうして残すことが他のジオパークへの貢献にもなる。これはお願い。

委員：私からも要望だが、日本のジオパークのなかで日本海溝から火山フロントまでをある程度コンパクトに説明できる貴重なジオパークなので、そこをうまく表現できるようにすることがひとつ。下北の冬の厳しい自然現象はまさかりの地形とも関係がある。陸奥湾と低地があり、西から直接下北に風が吹き抜けていく厳しい自然現象をうまく表現して、災い転じて福となすような、地形と地質でストーリーを作ってもらいたい。

下北：今回のプレゼンでは申請書に書ききれなかった部分を発表した。これまでの活動もなんらかの形で提供させていただきたい。まさかりになった形成過程そのものがおそらく地質学的に価値があると思っている。その点は今後、ガイドブック等に記していきたい。

(了)

筑波山地域

委員長：ボトムアップの体制は以前よりよく説明されていた。つくば市というと研究学園都市の特徴があるが、国の機関との連携はどうか。

筑波山地域：農研機構の農業技術の方には土壌の関係で付き合いがあり、防災科学技術研究所とも連携している。筑波大学とはもともと付き合いがある。つくば市は単独で基本協定というものを研究機関と結んでおり、担当とは話がスムーズ。

筑波山地域：国土地理院とは防災の講演を行った。パラボナアンテナをたて、その施設の中にジオパークブースを設置している。国立環境研とは、霞ヶ浦の保全についてのフォーラムを開催するなど様々な機関と連携している。

委員長：筑波山といえば、がまの油が頭に浮かぶが、がまの油はジオストーリーから消えてしまったのか？

筑波山地域：来月、がま工場の保存会の人達がジオを知りたいとのことでプレゼンをする予定もある。関係は深まっている。

委員：前回のプレゼンでがっかりしたのが、自分のところだけ応援してその後いなくなったこと。地元を愛することは重要だが、ネットワークでやることであって自分のところがよければよいということがジオパークではない。第一点としてこの2年間でどうやって変えてきたか、何を学んできたかを教えてほしい。二点目はストーリー。関東平野に抱かれた、という言葉が入ったのはよい。「平ら」というのは普通ではなくて実は珍しいことだったりする。関東平野はジオパークの市場があるところで、つくばとしては売りになるのでは。平野を見せるというのが、あまりプレゼンで、でてこなかった。筑波山に登ってみて、平野がおもしろいと思ったが、そのへんをどのように展開していくか。三点目は、関係省庁とはどうやって関係を持つか。つくば市に本部を

置きそれぞれ事務所があるということだがそれでうまくいくのか、全体事務局は作らないのか。四点目。地震が多いので地震活動をどのように説明し、ジオストーリーに入れるかを教えてほしい。

筑波山地域：一点目。部会の人がJGNの理念を理解していなかった。JGN、JGCの考え方を伝えるようにした。採石場問題は、当初反発もあったが、話し合いをして理解してもらい、広まっていった。三点目の事務局の連携はつくば市がリーダーシップをとっていた。本部になって他を支部にして、土浦市が教育部会、霞ヶ浦と石岡市が市民活動、地域振興は笠間市と桜川市が担当している。

筑波山地域：まず平野の形成について。ジオサイトを見せる前に、必ず高いところに登って、この平野の平らなところを見ていただいている。筑波山からは富士山も見えるしスカイツリーも見える。平らであるがゆえに見えるということを伝えるようにしている。平らでなかったらどうなるか。南北に歩くと平なのだが、東西に歩くと大地と低地が繰り返すギザギザ感を感じていただける。もうひとつは、防災の観点も含めて、蛇行河川が氾濫原をつくり平らな部分をつくったという自然の災害が、平地での農業を育てているというようなことをまず鳥瞰的に見せて最終的には自分の足で見てもらい地元の見慣れたものに繋げていくようにしている。地震について。3つのプレートがひしめき合っている珍しい場所であり危険な場所。残念なことに、断層や地震によってジオサイトをみせるのが難しい。今回、鶏足山塊を入れることによってプレートの移動と沈み込みのメカニズムを紹介して、地震がおき断層ができるのを説明できればと思う。実際の震度より大きく感じるのは関東平野が軟弱な地盤であるためだが、科学的な根拠を紹介して説明していこうと思う。

筑波山地域：研究機関との連携については、つくば市自体が非常に連携を密にしている。実際、計画をつくる段階から各研究機関から指摘をうけている。様々なテーマ館では子供たちの9年間連続した教育においても連携している。みんなから愛される地域を目指したい。筑波地域というのは研究学園地域と、もともと生活がある地域との間で温度差がある。そこでジオパークをみんなで作ったりあげることを通じて、郷土愛を醸成していきたい。

委員：研究学園都市にある様々な研究機関は、日本全体、世界的視野で活動をしている。ジオパークとつながりが薄いところもある。筑波山地域が入口になってJGN全体に、さらにGGNにつなげていくような活動をしていただきたい。どこに行ってもどんなことを学んだかを教えていただきたい。

筑波山地域：ご指摘いただいたことは今後の課題として活動をしていければと思う。

委員：研究学園都市の特徴としては外国人留学生や研究者が多い中、外国人のためのオールイングリッシュのガイドツアーがあると聞いたが、その実績を教えてほしい。他のジオパークにない特徴だと思う。

筑波山地域：地域市民活動プラスという意味は二年前の市民活動のレベルからさらに付加価値を作ろうということで外国人むけのジオガイドをこの3月に初めて行った。

委員：筑波大学は留学生が多いので、どんどんやっていただいて外国に発信してほしい。

(了)

浅間山北麓

委員：土壌学が専門なので、この地域の学術的価値をもっと高めていけたらという視点でコメントする。申請書の地形・気候・生物・生態系のところにも書かれているが、この地域は噴出した時

期がわかった溶岩流の上に植生が発達してきたということが実感できる貴重なサイトだと思う。ジオと生態系、ジオと人間の営みをつなぐという意味で土壌にも目をむけていただけたらと。岩石の上に突然植物が生育していくのではなく、岩石が風化して土壌になり植生が発達し、豊かな土がキャベツ畑になっているという一連の流れが見えるので、そのような視点を入れていただくと価値が高まるのではないかと。

浅間山北麓：浅間山の災害から恩恵も受けている所。農村地帯は浅間山の火山灰土による土地。かつては不毛地帯だった。黒土で農業には不向きな土地だった。地元では「のぼう土」と呼んでいる。「でくのぼう」からきている。見かけはよいのだが役に立たない土という意味。戦後改良剤によって農業に利用できる恩恵を受けられる土にした。

委員：植生の変遷を書いているが、ジオサイトのほうにはあまりでてこないもので、その視点も入れてアピールしていただけたらと思う。

浅間山北麓：植物もジオの魅力。噴火が頻繁に起こるのでいつまでも酸性から脱皮しない。酸性の好きなつつじ類が多く、きれいで魅力的な場所。森が茂ってくると爆発してまた酸性土で荒地になるので、ほとんどがまだパイオニア植物。その繰り返しが続いている。

委員：できたら溶岩流の年代の違いと植生を発達を整備してアピールしていただけるとよい。もし露頭で土壌と火山灰の繰り返しの層があればそれもアピールしていただきたい。

委員：主に体制についてお尋ねしたい。浅間山北麓ジオパーク構想という名前だが、申請母体は浅間山ジオパーク構想推進協議会となっている。そのいきさつや関係を聞きたい。なぜ北麓だけなのか。浅間山といえば南側もあるはずだが、それを将来的にどう取り込むか。

浅間山北麓：平成23年にジオパークの勉強会をスタートした。2市3町1村ある。浅間山を中心にジオパークをやるということで勉強会を立ちあげたが、その時は長野県を含めたジオパークでスタートしようということで、浅間山ジオパーク構想推進協議会にした。なぜ北麓にしたかということ、長野県地域住民の周知ができていないということで、現在はジオの住民のワークショップやガイド講習会を長野県がしてくれている。群馬県にも十分なストーリーがあるジオがあるだろうということで北麓にした。日本地質学会が群馬県の岩石と認定した鬼押し出し園があったり、北軽井沢には観光の中心の旧草軽電鉄があり、苦労した開拓の歴史など、あるものを十分に知っていただくには北麓だけでできるだろう。将来的には浅間ジオパークでまとまっていく考えもあるので協議会名はそのまま残して、とりあえず群馬県側に今ある1村1町でジオパークを実現したい。

委員：組織図をみると、協議会の中に小諸、御代田、軽井沢が入っていない。観光協会が入っているが、ジオパークをすすめていくなかで、主導的に考えられる組織ではない。協議会で浅間山を取り込んで全域的なものに発展させられるか、見通しを聞きたい。

浅間山北麓：長野原町町長と小諸、御代田、軽井沢とは話をし、勉強会にも加わってもらっている。浅間山麓の観光推進協議会の会長が、いいでしょうと言ってきている。環境省に指導いただき、年間500万ほどで長野の方とも継続的に勉強をしている。必ず将来、長野県の皆様も仲間に加わることを前提にしている。

委員：是非、実現できるように努力してほしい。ジオパークは火山防災の上で機能する非常に良い組織であり、噴火があったとき、北側しか動かないというのではこまる。火山防災協議会とも連携した取り組みをしていただきたい。また、別荘地との交流も始まっているということで少し安心した。以前、住民はあまり関心を示さないということを知ったことがあったので、良い方向に行っているという気がする。さらに、申請書にも今の発表にもなかった浅間園と鬼押し出しの関係について。お互いの説明がない、妙な境界がある。今度ジオパークになるにあたって、どのよ

うな関係が築けるか。協力体制、特に西武グループがどのように絡むか聞きたい。

浅間山北麓：プリンスホテルは協議会のメンバー。拠点のひとつにもなっている。浅間園は、4月よりビジターセンターをめざすとして、趣を変えて再スタートしたところ。プリンスとも協力体制を強化していく。

委員：鬼押し出し園に来る人は多いと思うので、そこでジオパークをきちんと宣伝できることが重要だ。是非協力してやってもらいたい。体制に関しては以上。その他、申請書を見る限りジオに偏っているのもっと文化的なところ、キャベツ畑の話とか、ジオと絡めて話しを展開する工夫が不足しているという印象。審査で確認したい。そのへんをどう考えるか。

浅間山北麓：そのへんを扱うジオガイドを準備しているし、キャベツ畑の商品も作っている。今後もっとアピールしていきたい。

委員：お願いだが、オブザーバーの4市町の首長には、現地審査の際に一緒に来ていただきたい。ここにはオブザーバーのこれからの話が何も書かれていない。実際は孀恋しか動いていない。働きかけや関わりが一緒にやるには弱い。

(了)

月山

委員：組織と体制について。協議会の傘下に多くの団体が入っている。商工会などは、どの程度ジオパークを理解して参画しようとしているのか、例を伺いたい。

月山：組織的にはまだ途上。総会、シンポジウムではコンスタントに150名くらい集まっていたいている。徐々に浸透してきていると思う。

委員：次に月山マイスターの件。山形大学が中心になっている月山マイスター養成講座、ジオパークのほうでもジオパークガイド養成講座があるが、その両者の関係は怎么样了。

月山：専門分野のガイドがたくさんいる。例えば「ブナの森自然学習の会」や「三山の歴史の会」。しかし、ジオの学習はまだやっていない。一方マイスターの方々は月山のジオの勉強をしているので、マイスターからそれぞれの分野のガイドに伝授していただく。そうすることでフィールドが奥深く、広がっていく。ガイドのジオの基本知識を会得していただいた上で改めてジオガイドの認定をする体制をとっている。

委員：これまでガイドをしていた人も月山マイスターも改めてジオガイド養成講座にでていただいているということか。

月山：昨年度は33名誕生した。

委員：事務局を増員するという話があったが、地球科学の専門員を雇用する予定はあるか。

月山：専任の職員を今年雇用する。山形大学の理学関係のドクターを雇用する方向で会長が面接をしている。

委員：ジオサイトの保全について。国立公園にもなっているので法令に基づいて保護されているサイトや国有林があると思うが、例えば環境省や林野庁とどのように調整しているか。

月山：国立公園に指定されており、特別保護区の範囲が広がっている。環境省の自然保護官をアドバイザーとして迎えている。保護のあり方は調整しているし、それぞれの地域にある自然整備の団体、協議会と環境省が連携して保全活動にあたっている。

委員：保護されている地域以外にもジオサイトがあるが、ジオサイトであって重要なところだということや、ジオツアーなどで使うことについて所有者の理解が得られているか。

月山：どのように歩けるように整備していくかは年次計画のなかで整備したいと考えている。土地の所有形態はほとんど民有地が少ない。

委員：拠点施設は。

月山：たくさんあり、ひとつは、環境省の月山ビジターセンターでは地形・地質や植物、生態系などすべて学べるようになっている。県立自然博物館、ブナの森をフィールドにして、ブナの生態系を学べるところもある。山麓に生息している動植物の博物館もあり十分に語れる拠点施設はある。

委員：そういうところとジオパークにおける協力関係は。

月山：協力関係はたいへん良好。

委員：何か、展示等すでに始まっているのか。

月山：いろいろな会合に参加してもらっている。

委員：構成団体で出羽三山の日本遺産をしていたり美しい村の連盟に加盟していたりするところがある。その上でジオパークに取り組むという意義は何か。労力を使ってでも取り組む価値、戦略があるのか。

月山：例えば日本遺産は一点主義であり国から指定されるものである一方、ジオパークはグローバルな視点での活動。自分達が住んでいる所、地形・地質・気象含め科学的な視点を入れてどういうところかということを中心に理解する。その上で私達の生活が成り立っている。その中で宝物を見つけたののように次の時代に引き継いでいくかを考えるなら、まさにグローバルな取り組みなので、日本遺産はうまく活用しつつ包括的に展開していきたい。

委員：個人的には、日本遺産でもできるし、美しい村でもできると思う。それが、なんとなくうまくいかないからジオパークを目指すというのであれば、ジオパークでも同じことがおきるのではないか。

月山：そうではない。ジオパークのすごさはボトムアップだと思う。ファクターとしては美しい村連合とか、国の重要文化財、国宝もある。それらを包括して全体的に体系化できるのがジオパーク。

委員：次にジオツーリズムやストーリーについて。恐れと恵みという観点で申請書にうまく整理してよく書かれていると思う。様々な地形・地質の成り立ちと災害や気候、生態系、人の暮らしとの繋がりについて地元で理解を深めようとされている。それが川下りの方、観光協会の方にどの程度浸透しているのか。

月山：正直なところ今年度になって突然、ジオパークという言葉がでてきたと感じている。今まで人間的なジオパークを船頭が語ってきたが、最上川、最上峡の美しさは、改めてジオ的なものと教えてもらい、船頭達も勉強になっている。外国からのお客様を含め、お客様もそういうところを求めている方は少ないことがわかり、これからは癒し、松尾芭蕉が下った川、文化的歴史的な産業を発展させた川、プラス世界的規模のジオパークである最上川、月山の恵みなのだと知らせていかなければだめだと再確認したところ。

委員：様々な団体や住民の方に、月山の自然と人のストーリーをどのような仕組みを使って伝えようとされているか。

月山：雪、風、地すべり、たいへん自然環境が厳しい。生活のたいへんなところ、危ないところだけで語らない。例えば、たいへんな除雪作業を嘆きぼやくのではなく、自分達の地域のいいところを見直していくためのジオパーク活動を目指している。

委員：地元の理解としてはこの「雪・風・大地のおそれとめぐみ」というキャッチフレーズはよい。

地元の人が自然と暮らしの成り立ちを理解できてよい。ただ、外から見たときに、このキャッチフレーズを見て人が訪れたいと思うかという点と違うのではないかと。観光で考えた時に、見えないものが多い。例えば、風をどう見せるか。出羽丘陵も盛り上がっているのを実感できるサイトがあるのか難しい。見えない部分をどう見せるのか。

月山：見せる部分は弱点だと思っている。きちんと生活、地形・地質を語れるガイドの力が大きいと思う。生活を語れ、動機づけて語れるようなガイドを養成しなくてはいけないと考えている。

委員：ジオパークなので地形・地質のところまできちんとお客さんが理解して楽しんでもくれるようなストーリーを工夫してほしい。地形はあるが、地層や岩石の見所は難しいところがある。

月山：地形・地質でのサイトが弱点ではあるが、雪を見られること自体が最大のジオサイト。例えば風の強さを体感してもらい、風力発電をしている最上川の現場を見ていただくことで補えると思っている。

委員：この間の熊本地震では、こんなところに断層があったことは知らなかった、という話しができた。ここも出羽丘陵が盛り上がっているのは当然断層があるからなのだが、地震や断層についてはジオパークで語るのか。

月山：今日はジオサイトを地形的な写真で表していないが、地質の変化等を見せられるようにしている。かつて海底であった地質の層がわかるような。

委員：おそれとめぐみというのは自然現象に人間が関わって生まれるのだと書かれていた申請書を読んだのは初めて。過去、現在、未来を語るととてもよいと思う。未来をどうするのかまで語るとユネスコが言っている持続可能な人間の生活につながるのだから、是非、おそれとめぐみの過去、現在、未来を語ってほしい。

月山：未来の部分について。今、子供たちがゲームの世界で人間性を失っているが、ここで自然と関わっての生活文化を体験してもらおうと子供たちの五感が違ってくる。また都会で心身を病んでいる人に森林浴していただき再生してもらおう。現代版の山岳信仰も大事にしたい。

(了)

鳥海山・飛島

委員：鳥海山と飛島との関わりについて。歴史的な繋がりが独自の文化を作ってきた要素になったと理解したが、地質的にはバックグラウンドが違うので、そのへんをどう位置付けるか。

鳥海山・飛島：鳥海国定公園として飛島と鳥海山がある。飛島は日本海から削られてできている。鳥海山の恵みである湧水の源が日本海暖流である。日本海を介した繋がりがあがる。地質学的な部分はまだ研究課題。

委員：1500万年前に日本海拡大があり日本海側のジオパークはだいたいそれがストーリーに入っているが、鳥海山だけとりあげるとどうしてもそれが入ってこないで飛島を入れれば古い年代のところまで、もっと大きなジオの話ができる、という理解でよいのか。

鳥海山・飛島：飛島にみられる玄武岩が日本海全域において解析されるきっかけになるのではないかと。

委員：次にジオストーリーについて。意図しているのか、ストーリーのくくりが自治体によって分かっているのだが。自治体の境界線とジオの分布は無関係なので、どのような意図でエリア設定、ストーリー設定をされたのか。

鳥海山・飛島：申請書に書いたストーリーについては偶然。鳥海国定公園とそれを日本海で結んだ

ところを行政区域で一筆書きにしてエリア設定している。行政区域にした意図は、湧水の数が500ほどあり、また正確に調査したわけではないのだが、断層帯、砂丘地そこに育まれた様々な民俗芸能など、行政が主体となって守ってきたものや引き継ごうとするものを踏まえると、行政区域でエリアを設定することが、ジオの活動をしやすくするのではないかということ。

委員：3つめはキャッチコピーがたいへんキャッチー。「Touch!」という言葉が頭に入ってくる。

地域の皆さんで考えたということですね。その言葉の具体的な意図は。触るという言葉はどう使っていくか。30年経った時はどうか。言葉に込めたニュアンスや想いを伺いたい。

鳥海山・飛島：「Touch! ふれる・楽しむ・好きになる」の、「ふれる」は、地域に直接ふれ、その活動を楽しむ。地域の方もお越しになった方もこの地域を好きになってほしい。お年寄りも子供ももう一度この地域を好きになってほしいという願いを込めて作った。

委員：それを実現するような活動を地域の皆さん中心ですすめていくということですね。

鳥海山・飛島：我々の行動を表すためのキャッチコピー。湧水の中に足を入れて子供たちが騒いでいるように大地の活動を体感してもらい記憶してほしい。そしてこの地域で育っていきながら外で紹介してもらえれば。

委員：外からの人も同じように体験してほしいということですね。

委員：良い申請書とプレゼンだと思う。少し意地悪な質問だが、このジオパークは他の日本海側のジオパークと同じではないか。白山、立山・黒部と似ている。湧水があり山があり、日本海の形成の歴史があって。どこが違うのか。

鳥海山・飛島：日本のなかで違いを明確に示すのは難しい。鳥海山の溶岩が日本海まで達しており、その湧き水が日本海にも湧き出ている。また鳥海山の降雪量をアピールできればと思う。

委員：申請書に湧水の分布図があった。ある雑誌に、湧水からプランクトンがでて岩牡蠣のもとになっている話があった。鳥海山の湧水が大地だけではなく海底にもあるのであれば申請書の分布図にも噴出口を書いてもらおうとよい。もうひとつの質問。エリアがいくつか分かれているが、エリアごとに話が完結している。エリアをまたぐストーリーやジオの話がほとんどないが、この点はどのように考えているか。

鳥海山・飛島：あえてそのような意識で書いたわけではない。ジオストーリーのたて方としては、鳥海山の地滑り等は共通する項目としてあり、湧水の数も500あるので、湧水めぐりや、水の違いによって酒の違いをめぐるジオツアーなど、面白いのではないかと思う。

委員：面白いと思う。糸魚川でもやっているので参考にするとよい。ストーリー作り以外の特徴というのは、3市1町の広域連携。秋田県と山形県の連携が、エリア別のストーリーをみていると、うまくいっているのかという心配がある。

鳥海山・飛島：心配していない。事務局もそれぞれの町、市からでいただき、現在、専門員も含め6人体制。他にアドバイザーもいる。横の連携については何も心配していない。

委員：持続的なもので首長が変わっても変わらないか。次に教育について。教育委員会が組織図に入っていない。総合学習体験やジオパークを正科の授業にするには、教育委員会との関わりは重要。今は臨時的な授業のようだが、持続的にジオパークの教育をするためにどのような試みをしているか。

鳥海山・飛島：これは事務局のミスと思っている。平成27年の4月から教育委員会制度が変わった。27年度から教育委員長の業務を教育長が引き継いで任命をすることになった。教育部門の副市長のような形。市長の傘下で大丈夫かとおもったが、実際は、各学校が、ジオ活動は直接の利益になると思わないとうまくいかない。

鳥海山・飛島：中学生を主体としてジオ学という学習をしている。今日のプレゼンでは話せなかったのだが、先生にもジオサイトをみていただいて、全体の中学校に広めていきたい。

委員：特徴として、地域の皆さんが考えたり提案したり、ジオサイトを発掘している。ジオサイトはどのように地域のものを掘り起こしてどうやってジオサイトだと決めているのか、そのプロセスを教えてほしい。

鳥海山・飛島：公益大学の学生と地域の方がワークショップを行い、地域のさまざまな素材をだしてもらい、また同じように由利本荘市のほうでもワークショップをしている人にいくつか出してもらい、科学的な根拠を証明するため精査し、ジオサイトカルテというものを先生の監修のもとで作り、サイトとしていく。明文化しているものはない。その点は他の地域を参考にしたい。

委員：ジオサイトカルテは今のようなプロセスで作られるのか。

鳥海山・飛島：すべてではない。各自治体でヒアリングを行ってジオサイトになりうる場所を探し、その上で、ある一定程度の数をつくった。実際に評価してみるとジオサイトといえるのか疑問なところもあるので削除もした。

委員：良いシステムなので、最終的な意思決定、学術的科学的な根拠を押さえてほしい。

(了)

萩

委員：萩というと毎年200万人以上の方が歴史観光を魅力として訪れている。かなり知名度がある。その中であらためてジオパークを目指す理由を教えてほしい。

萩：今までの観光は歴史・伝統文化だった。しかし私は常々、「文化、歴史、自然」と言っている。三方山に囲まれた山紫水明の地。海に点在する6つの島、火山があることを言うと皆さん驚く。萩は明治維新の地としても大事だが、自然のすばらしさも堪能してもらいたい。町や博物館はそのような趣旨でおこなってきた。三者一体となって観光に想いをこめている。

委員：今までの歴史観光に博物館のいろいろな取り組みがジオパークに繋がっていると理解してよいか。

萩：おっしゃるとおり。

委員：城下町、歴史的な居住地が三角州の地形に対応していると説明があった。現在歴史観光で訪れている人達にそういった説明をすることはあるか。

萩：観光面では2つある。萩市にあるボランティアガイド協会がジオパークに協力的な人達が勉強会を2年前から行っている。また萩博物館という拠点施設があり、「城下町萩の秘密」と題してちょうど今のテーマの企画展を開いている。

萩：決して萩の観光は歴史観光だけではない。例えば長門峡は大きなポイント。高島北海という地質学者が私財をなげうって長門峡の開発をすすめ、笠山を東洋一小さな火山で売り出し、萩の大きな観光ポイントとなっている。風穴が珍しい。厳島神社を勧請した明神池。繋がっているわけではないのだが海水が浸透している。いろいろなものがあり、決して歴史だけでない。

委員：市民の方たちがどのように関わっているか、またジオパークになった時にどのような組織形態になるか。

萩：推進体制は大きな課題。豊ヶ淵交流事業実行委員会の話をしたが、行政よりも住民主導で動いてきた。行政は支援する形であったが推進協議会の中に改めて位置付けるようにしていかななくてはならない。推進協議会には、趣旨に賛同している個人、団体全て会員になれることにしている。

新たな組織を作っていきたい。

委員：ボトムアップ的な活動で始まっており、望ましい形なので是非そのやり方ですすめてほしい。
地域の方たちの意見をくみ取ってもらえるようなしくみを作っていただけるとよい。隣接しているMine秋吉台との連携は検討しているか？

萩：地形地質では連携している。具体的にはMineが先行しているが、ツアーを商品化するなかで一緒にできればと考えている。

委員：組織運営について。阿武町と山口市との関係は？

萩：7つの市町村が合併した。壺ヶ淵の龍が通った道は旧二つの町。山口市は長門峡の部分、阿武町は伊良尾山山頂の部分。オブザーバー参加していただいているが今後は協力体制をもてると思う。7つの合併山口県は56の自治体が今19になっている。合併で広域的な運営になった。

萩：阿武町については住民レベルでは既に参加していただいている。行政では教育委員会を中心に教育の面では一緒に活動している。山口市とは観光の面で連携がすすんでいる。

委員：防災対策、教育はジオパークでどのように取り組むか。

萩：1例ではあるが、小中学校のジオパーク担当の先生にお願いして避難訓練に過去の萩藩が残した地震の記録等の資料なども活用して伝えることで防災に取り組んでもらっている。

委員：民間の方たちの知見をまとめてみたり、学んだりする拠点の整備に関しては計画があるか。

萩：萩博物館にジオパークの拠点をもっていく。市内にあった明倫小学校という木造の建物の再利用をすすめている。そこに萩の自然歴史文化を伝えるビジターセンターを作りたいと考えている。

委員：大地の恵みについて触れている部分がある。産業との連携について教えてほしい。

萩：推進協議会のメンバーに商工会議所が入っており、いろいろな取り組みをしている。萩市は少子高齢化がすすんでいる地域があり、その対策としてジオパークを位置付けている。新規就農の方にジオパークの勉強をしていただきながら新たな産業開発をしてもらうような取り組みを考えている。

萩：火山地域の農業はたいへん特殊なものが採れる。海も海底火山があり、八里ヶ瀬という日本海有数の漁場がある。海藻が繁茂して黒マグロが生息していたので築地の人が見学に来た。残念ながら一網打尽が続いたため、今はいなくなっているが、農業、漁業とも特色がある。

委員：伊良尾火山灰を保存することに尽力された永尾先生はジオパークが始まる前から活動されていた。火山学会からは感謝状を贈ったという経緯がある。地震学会、火山学会で地震火山こどもサマースクールを開催した。先生がいなくなられた後、学術面でのサポートは誰がどのようにしていくのか。

萩：専門員の募集を現在行っている。今までの研究を継続する。

委員：山口大学が学術顧問として入っているが、名前だけなのか。

萩：それぞれの専門分野でジオサイトのお手伝いをしていただいている。火山の専門の方がいないということと、ジオサイトの価値をいかに高めるかという観点でやっているので今の研究を継続して行うには新たな専門員が必要と考えている。

(了)

15：15-

机上審査

委員長：第26回の議事録の確認。会議が終わるまでに確認するというので、今からでもお気づき

の点があればお願いしたい。最初に、現地審査をやるかどうかを決めた上で計画を確認する。ユネスコ世界ジオパーク推薦の申請プレゼンテーションについて。霧島と桜島・錦江湾をどうするかご意見をお願いしたい。

委員：どうしたいか現地審査で確認してほしい。三島もオブザーバーで来てもらって。指宿も参加してもらっても良いのでは。

委員：審査でなく、関係者を集めての寄合？

委員：審査のプロセスのなかで。

委員長：それはよくない。

委員：審査以前の部分で日本ジオパークの方針として、それぞれ出してきたからそれぞれ検討するのではなく、ふたつ一緒にするのか、段階を経るのか考えないと難しい。

委員長：ユネスコになってからは最初。いままでは1枚カバーレターつけて出したがこれからはどうなるのか。決まっているのか。まだひな形がない。何か書かないと。JGCが推薦のお墨付きという形で書くのか。別々で出しても落ちるだろうと言っている人もいる。一緒になって出せないかという意見もある。伊豆半島をどうするかとも関係がある。JGCとしてはこの前から議論しかけていて、プレゼンを聞いてからまた議論しようと言っていた。今日の結果、少なくとも、皆さんが別々に現地審査に行く方向ではないように思えたが。ひとつずつ現地審査するのは難しい。かといって、合併を勧めたからといって、それで確実に推薦して通るのかもわからない。そのへんを議論してほしい。

委員：これまで、行かなくてもよいのではないかと saying いた地域にも現地審査に行ったことがある。報告書をださないといけないので現地がどうか実際に行ってヒアリングは必要ではないか。

委員：現地審査に行くことで、既にオーソライズと受け止められないか。

委員長：それはないと思う。

委員：行っても無駄だと思う。

委員：今回は現地審査はやめますと言ったほうが今後やりやすいのではないかと思う。

委員長：明確な理由が必要。その後どうするかを決めておかないと。今回は現地審査を見合わせるかわりに2地域で会合をしようと呼びかけるのか等、決めたほうがよい。

委員：行かないとしても、文書は提出しなければならない。

委員：結果報告を書くためにヒアリングが必要。

委員：今日の発表を伺う限り、日本ジオパークの活動を聞かせてもらったような気がする。ユネスコ世界ジオパークとしての準備や、何を貢献できるかについて答えられていなかったのが本当に世界を目指すつもりなのかと感じた。両方とも。

委員長：そういう理由で、現地審査は見合わせるが、しかるべきメンバーでヒアリングをするかどうか。現地に行ってもっと調査すべきだという意見はあるか。

委員：今日の発表だけではレポートは書けない。JGNの先はGGNでないことを念押しすることも必要。

委員長：それは言ってきているつもり。

委員：相談に行くのはいいが、普通の審査は無駄。

委員：関係者が集まる場を現地で作ったり、ヒアリングをするということはどうか。

委員：それがきっかけになって話し合いを始めてくれればよいということもある。

委員長：価値のあるエリアであることは間違いない。

委員：別のエリアだったら行くのか。出すならひとつという考えが皆さん底辺にあるように思うのだが。ユネスコ世界ジオパークとしてはなっていない。隣接しているから問題なのか。

委員長：隣接しているのに、ということ。伊豆半島は今どういうことになっているか。

委員：11月30日をめざして進めているが、体制が変わったので確約はできないと聞いている。

委員：ペンディングになっているので取り下げないかぎり2枠のうち1枠しかない。

委員長：だから調整するというわけではない。今のままで出すということであれば順番をつけないといけない。

委員：別々に審査するにしてもまだ世界レベルではないと個人的には思うが、他の地域で、それでも現地審査に行つて話を聞いてきているので、できれば行くべき。

委員長：とりあえず通常の現地審査は見送り、かわりに何かで対処するということは決めてよいか。伊豆半島がペンディングなのであと1箇所しか推薦できないというのは事実としてよいですね。ではかわりにどうするか。改めて明日にでも協議することでもよい。委員長、副委員長とどなたか。とりあえず現地審査は行わないことの説明をする場にする。それでは、日本ジオパークの申請地域7箇所についてまとめて意見を伺う。今日は現地審査担当者からも質問していただいたが、すべて現地審査に行くということによろしいか。いつものように報告書を作成していただき、次の委員会で諮ることとする。再認定現地審査員、資料2について。事務局から願います。

事務局：一度行かれたことのある地域は外し、初めての方もいらっしゃるので、それらを考慮して作成した。

委員：最初に伊豆大島に行っているがリストから抜けている。

委員長：行ったことのある人は外すというのはどういう趣旨で決めているのか。

委員：もともとは、いろいろな人の目で見ただけのほうがよいということ。未来まで適用するつもりはなかったが。

委員長：これだけ申請地域が増えるとそうは言っていられない。

委員：ひとつ前はやめることでよいのでは。

委員長：なるべくいろいろな所に行くということにして、また希望の地域があればそれも考慮してよいと思う。

委員：浅間山は元上司、同僚がいてやりにくい。

委員：共感してしまっても困る。

委員長：異論がなければこのメンバーでお願いしたい。これから日程調整に入ることになる。

事務局：現地との連絡は新規の場合は3番目、再認定の場合は2と3番目のJGNの担当者がする。

委員長：それでは事務局で指示してもらおう。

事務局：審査を受ける側の地域はたいへんなので審査員から外すということになっていた。よって大野さんを外す。

委員長：それでは再調整してください。

委員：糸魚川とか隠岐とか、行かれたことがない方は見ておいたほうがよい。審査員間でトレードしてもいいか。

事務局：一応事務局でバランスを考えてする。

委員：担当外のところを実費で参加してもよいか。

委員長：プラス1でも大丈夫の場合もあるが、早めに現地に連絡しないといけない。

事務局：事務局にご連絡いただければ調整する。

顧問：顧問も同行することは可能か。費用は自己負担する。

委員長：可能だと思う。事務局をとおして。次、資料3審査方針の確認。

事務局：大枠としては変更ないが、個性的なところを評価できるようにという点と2番目の目標の

ところを委員の指摘を踏まえて訂正した。

委員：再認定のほうはまだか。

事務局：はい。

委員：これはオープンになるか。

委員長：対象地域は除いておけば他用できる。公表する。議事録添付物で公表するか。

委員：議事録と資料は別。資料は早めにアップしてほしい。

委員長：対象地域には個別に送ればよいのでは。次、課題改善報告について。

事務局：白山手取川のアクションプランは先日メーリングリストで送らせていただいた。三島村・鬼界カルデラは夏頃提出予定。栗駒山麓は提出されている予定だったが少々遅れている。

委員長：受領お知らせの書簡案があるが、これでよいか。内容は、きちんと確認している旨を伝えるということ。

委員：貴地域でなく貴ジオパークにすべき。

事務局：細かい記述は手直ししておく。

委員長：全て名称に協議会がついているわけではないので貴ジオパーク。その他は適宜修正して簡潔に出すということによいか。

委員：白山手取川のアクションプランはどうか。

委員：確認した。問題ない。

委員長：残りの3地域についてはその都度確認する。担当の方、宜しく。

委員長：栗駒はいつ提出か？

事務局：今週中とのことだったが、まだ。

委員長：今後の予定。次回の委員会。9月5日の欠席者が一番少ない。しかし、その日は同じ地域の現地審査員が2人とも欠席になってしまうので、9月9日(金)の午前にする。9時-13時に次回の委員会を開催することにする。

事務局：午後都合が悪い方には午前中に早めに話していただく。

事務局：さらにその次の委員会の日程にうつる。1日がJGC、その後交流会、2日にユネスコの事業化にともない、現地審査員の研修会をJGC主催で行う予定。3日目はアジア地域のジオパーク各地域の中心人物に来てもらい意見交換を行うのでお時間のある方はそれにも任意ですがでてください。

委員長：3日目を前にもってくることは？

事務局：1日目は、JGNの現地審査員は出てくる必要はないのでこの順番が適当。

委員長：わかりました。そうすると夕方交流会があるので12月9日の午後からやればよい。午後13時から18時まで。夕方に交流会。

委員：3日目はどこが主催か。

事務局：1、2日がJGC主催、3日目はJGN主催。

委員長：その他の議題に。

事務局：今回のプレゼンテーションの会場は入りきらなかったので入れ替え制で入場制限をした。JpGU(日本地球惑星科学連合)から日程を切り離して行えばもう少し会場の選択肢がある。研究者側の都合で日程を合わせているということだった。

委員長：ついでに1日登録してポスターも見ていきたいという人もいる。大会の中で研究発表を行う、という繋がりの方がよい。切り離さなければならない理由は会場の問題以外にはないだろう。

事務局：今回のように制約があっても構わないというのであれば同じようにとる。最大限大きな部屋にはするが。ただ費用の問題もある。

委員：可能ならストリーミングができればよい。

委員長：参加費をとってもよいのでは。

委員：何名まで無料としてそれ以上を有料にし、大きな会場で行うのはどうか。

委員長：それも一案だ。できるだけ多くの人に聞いてもらったほうがよい。大きい会場になればガイドの方も多く参加できる。

委員：有料にしても聴くと思う。とても良い発表をしていた。

委員長：早めに募集してたくさん来たら交流会にも来てもらえる。

委員：見てもらう価値があるので、ストリーミングをJGNとして検討してほしい。研修会も事務局は参加しているが、地域のガイドさんはほとんど見ていないので。報告会をしていただいているとは思いますがライブではしていないので、負担がかからない方法でリアルタイムで見てもらえる方法を考えてほしい。

委員長：ガイドさん同士が交流するのはよい。そういった仕組みを是非考えてほしい。その他には。

事務局：明日は交流会と総会がある。総会もご参加できるので。マルティニーニさんとの意見交換もある。

委員：明日聞いていただいた結果で(霧島と桜島・錦江湾)の現地に行くかどうか決めるということですね。レポートは事務局がまとめてくれるということですか。

事務局：レポートというかメモを残す。音声をとる。

委員：世界ジオパーク総会を9月26日から30日までイギリスのデボン州リビエラで行う。行く機会のある方はよろしく。

事務局：JGNで昨年まで行っていたジオパークABCはJGNとしては今回行わない。民間業者が行う。渡辺さん、斉藤事務局長、私、北海道地図の永田氏でベーシックな話を半日研修で行う。NPOではないので多少値上げする。日程は6月22日。

以上